vācārambhaṇaṃ vikāro nāmadheyam

後 藤 敏 文

—目次—

—注の内容抜粋—

1.1.　Upaniṣad 文献に名高い Uddālaka Āruṇi の教説（Chāndogya-Upaniṣad Ⅵ）中に現れる *vācārambhaṇaṃ vikāro nāmadheyam*（２ヶ所合計７回）の解釈をめぐっては，古くから諸説があった。[(1)]この事情は最近の翻訳を見ても変わっていない。

Uddālaka Āruṇi は万物をいわば質料因から捕え，その本質を唯一の（根源的）実体たる「有」，およびそれから派生する３要素（熱 *tejas*，水 *āpas*，食物 *annam*）の構成に帰するが，哲学の具体的内容に立入るに先立ち，彼の視点[(2)]の何如なるものかをたとえによって[(3)]息子の Śvetaketu に示す（Ⅵ 1,1—7）：*yathā somyaikena mr̥tpiṇḍena sarvaṃ mr̥nmayaṃ vijñātaṃ syād vācārambhaṇaṃ vikāro nāmadheyaṃ mr̥ttikety eva satyam*「たとえば，我が子よ，一つの土団子によって全ての土製のものが認識されたことになろう。[(4)] *vācārambhaṇaṃ vikāro nāmadheyam*。『土』というのだけが真理なのだ」（Ⅵ 1,4）。同様に，銅の飾り玉：銅（Ⅵ 1,5），爪きり：鉄（Ⅵ 1,6），更に本論中にも火・太陽・月・

稲妻を例として *vācārambhaṇaṃ vikāro nāmadheyam* の表現が用いられるが，そこではこれに続いて *trīṇi rūpāṇīty eva satyam* 「三つの形（熱・水・食物）だけが真理なのだ」（Ⅵ 4,1—4)と結ばれている。

1.2.　この文の主旨は例えば壺・皿・煉瓦といった個々のものは実は土が形を変えた物にすぎない，というのであるから，極く自然な訳としては，第一に，『變異は〔唯〕言語による把握（＝語彙上の區別）なり。即ち名稱なり』（辻，ヴェーダとウパニシャッド，1953，p.219, p.221)，あるいは "Die Umgestaltung (d.h. z.B. ein irdener Topf) ist ein (sekundäres) 'Be-greifen' mit der Sprache, eine Namensgebung" (HAMM, WZKSO 12/13，1968，p.150)が考えられる。この際，*vācārambhaṇam* という単語の意味の解釈はひとまず置くとする。主語が *vikāra-* であることは特異な見解を提出した VAN BUITENEN も基本的には疑っていない：In the first sentence of our phrase *vikāraḥ* must be the logical subject (IIJ 2，1958，p.301，cf. p.295　注4)。*vikāra-* が「変容・変様すること，させること，変容・変様したもの」(Umgestaltung，Umwandlung，Veränderung)を意味し，今の文脈では結果として個々の物を指すことは改めて用例を引くまでもない。[5] ただし，VAN BUITENENは　—名詞構文の主語は文末に来るという考えを前提としているのであろう—　文を *vikāro* の後ろで区切り，*nāmadheyam* … *ity eva satyam* を一つの文（彼にとってはphrase)と解釈する。他には BÖHTLINGK，岩本の訳がこの様に文を区切る。しかし，*nāmadheyam* で新しい文が始まるとした場合，「土/銅/鉄という *nāmadheya-* こそ真実なのである」等の謂となるが，*nāmadheya-* はもともと 'das Namen-Geben，das Namen-Bestimmen'「名付け」，[6] 更に普通「名，名称」の意味で用いられ（cf. Altindische Grammatik Ⅱ-2 p.827)，ものの背後にある質料として考えられている土・銅・鉄，ないし三構成要素 *trīṇi rūpāṇi*（＝*tejas, āpas, annam*）のことを言うよりも「土団子」・「銅の飾り玉」・「爪きり」，ないし「火」・「太陽」等々といった個々の変様物の「名称」(cf. *nāmarūpa-*「名称と形態〔＝個物〕」，注５の引用箇所をも参照）にこそ相応しい，という問題がある。(SCHAYER, Zeitschr.f.Buddhismus 3, 1921, p.244 及び同4, 1922, p.220 をも参照すべし。）♯*nāmadheyam*…*iti satyam*♯という語順も必ずしも自然とは思われない。そもそも，次節に見る如く，文を *vikāro* の後ろで区切らねばならない理由は無いのである。

2.1.　上述の如き自然と思われる訳（辻，HAMM）を離れて多様な解釈をもたらすに至った主な原因の一つは *vācārambhaṇam* 以下の三つの名詞の語順につき，スィンタクス上の関係が明らかでなかったからである。HAMM は P.50　注8 に *vikāraḥ* が主語，

vācārambhaṇam と *nāmadheyam* は述語名詞とのみ断言し，説明を加えていない。また，この様な単純でない名詞構文については，スィンタクスに関するこれまでの諸研究も扱っていないようである。しかし，HAMM の断定に根拠のあることは同じ章の ChU Ⅵ 8, 4 *sanmūlāḥ somyemāḥ sarvāḥ prajāḥ sadāyatanāḥ satpratiṣṭhāḥ* により名瞭かつ十分に支持される。即ち，この文は「これら全ての生類は，わが子よ，有を根とし，有を拠点とし，有を本居の場としているのである」としか解せない。*imāḥ sarvāḥ prajāḥ* が主語，先頭の *sanmūlāḥ* が述語，更に文末の *sadāyatanāḥ* 及び *satpratiṣṭhāḥ* がそれぞれ述語の同格として補足説明・限定をなす。即ち，Vokativ（他に多く例があるように，文の二番目に置かれている）を除いて，述語－主語－同格述語（±同格述語$_2$）という語順は標準的であり，この語順に合わない場合こそ文中のいずれかの要素が特に強調された特別な語順であると判断される。→ Puruṣasūkta Ⅹ 90, 1ab sahásraśīrṣā púruṣaḥ sahasrākṣáḥ sahásrapāt

2. 2.　もし，*vācārambhaṇam* が *nāmadheyam* を修飾する形容詞であると考えるならば（MAX MÜLLER，RADHAKRISHNAN，辻1959，MEHLIG），*vācārambhaṇam* は「ことばを拠り所とする，ことばに依存する」を意味する Bahuvrīhi であり，かつ，被修飾語（*nāmadheyam*）の直前ではなく文頭に置かれていることから，特に強調されたものと解釈される。(この，形容詞が文頭に被修飾語と離れて置かれる語順について，今相応しい例を挙げ得ないが，ICKLER，Untersuchungen zur Wortstellung und Syntax der Chāndogyopaniṣad, 1973，p.98付近参照。）この場合，ことばに依存しない名というのが考え難い以上，何故強調されたのかが疑問となろう。しかし，結局問題は *vācārambhaṇam* の語の解釈と関わってくる。

3. 1.　*vācārambhaṇam* をめぐっては，比較的最近では次の二学者の間に論文の応酬があった：VAN BUITENEN, Indian Linguistics 16＝Chatterji Jubilee Volume（1955）p.157—162, IIJ 2（1958）p.295—305; KUIPER, IIJ 1（1957）p.155—159, IIJ 2（1958）p.306—310。その余の研究文献については KUIPER, IIJ 1 p.156 注 5—6及び DEBRUNNER, Altindische Grammatik Ⅱ-1, Nachträge p.72 (: 249, 41)に詳しい。

この語が複合語であることは最早自明としてよいであろう（cf. KUIPER, IIJ 2 p. 306f., 異論は例えば SCHAYER, Zeitschr.f.Buddhismus 3, 1921, p.244 注 2 ）。問題は(1) *vācā* が格形(Instrumental)か，二次的な語幹形か，(2) *ārambhaṇa-* が「捕まえること」（あるいはそれから派生する「始め」，「従事・活動」など）か，「拠り所」か，の互に関連した二点に要約される。互に関連するというのは，例えば KUIPER が *vācā* を Prākrit 形に基く二次的語幹と主張する背景には，彼が始めから *ārambhaṇa-* の意味を

「つかまえる」とは別起源の「拠り所」であると決めていたという事情がある（cf. "This possibility〔'beginning' 乃至 'a hold'〕I have overlooked in my former paper" IIJ 2 p.309）。「ことばによる（Instr.)拠り所」というのはそもそも考えがたく，*ārambhaṇa-* が「拠り所」を意味すると仮定するならば，「ことばに依存する」という Bahuvrīhi か（cf. **2.2**），「ことばの拠り所（ことばが依拠するところ）」（HERTEL の訳参照），乃至「ことばへの依存」（OLDENBERG, GELDNER；但し *ārambhaṇa-* に「依存すること」という意味での実例は他に無いと思われる）と理解せざるをえない。「ことばによって捕まえること・言語による把握」（SCHAYER, OERTEL，辻〔ヴェーダとウパニシャッド，1953〕，DEBRUNNER, THIEME，岩本，HAMM，服部）と解釈する場合には(1)に挙げた二つの選択肢は理論的にはどちらも可能である。*vācā* が語幹であれば「ことばを捕まえること・使うこと」（cf. VAN BUITENEN "taking hold of vāc"）という解釈も成り立ち得る。

3.2.　*vācārambhaṇa-* が「ことばによる把握」であり，*vācā* が Instrumental であるという見解は OERTEL, Zu den Kasusvariationen in der vedischen Prosa II（SbBAW 1938-6）p.8 注 2 にはっきりと述べられる。[7] Ṛgveda X 125,8は，すでに指摘されているごとく（COOMARASWAMY, HJAS 1, 1936, p.61 注38 ［KUIPER, IIJ 1 p.159 注18による］，DEBRUNNER, AiG II-2, Nachträge p.72），「ことばによってものを捕える」という表現形式が実際に古くからあったことを証左する：

ahám evá vā́ta iva prá vāmi̯y

ārábhamāṇā bhúvanāni víśvā

「我（＝Vāc-）こそは風の如くに吹き進む，
全ての諸世界を捕えつつ」。

そして，より具体的には，OERTEL loc. cit. の引用する Śatapatha-Brāhmaṇa XII 2, 4, 1（*vācā́ hy àrábhante yádyad ārábhante*　「人々が何にせよものを捕えるのは，ことばによって捕えるのだから」。OERTEL の引用はやや不正確），Pañcaviṁśa-Brāhmaṇa IV 3，3 および Gopatha-Brāhmaṇa I 5，4 によって支持される。

3.3　複合語の前肢に語幹 *vāc-* ではなく（その場合 Sandhi によって **vāgārambhaṇa-* が期待される），Instrumental *vācā* が用いられるのは文法的に必ずしも第一に求められる形ではないかも知れない。しかし，十分考えられる可能性は「拠り所」（RV—Br.）ではなく「把握」，それも「ことばをつかまえること」ではなく「ことばによって〔ものを〕つかまえること」という意味をはっきりさせる為には Instrumental が好ましかったということである。それでなくとも哲学者が表現の厳密を期する為に，必ずしも文法的に，あるいは語法的に一般に通用していない形を強いて用いること，それも，人工的な

複合語を創出して用いることは，古今東西を通じて多く見受けられる。[8]成程 KUIPER が Epik, Purāṇa, 後期の Sanskrit の，特に複合語の前肢に，稀かつ変則的に現れる *vācā* の例を挙げて主張する如く，一種の Prākrit 形を基に(Prākrit での子音語幹の衰退に伴い，女性名詞では *-ā-*, *-ī-* 語幹への移行がみられる。Cf. PISCHEL § 413; 例えば pāli *vācā-*), *vāc-* (*vāg°*) のかわりに二次的語幹 *vācā-* が用いられたという可能性が無いとは立証できないであろう。[9]Chāndogya-Upaniṣad には他にも日常言語からの影響が見られること，既に度々指摘されている通りである（KUIPER, IIJ 1 p.156 注4, IIJ 2 p.308f.の挙げる文献参照)。しかし，この件に関して示唆に富むのはむしろ KUIPER（IIJ 2 p.307)が単に孤立した例として片付ける *vācā́-stena-*「ことばによって盗む人，ことばによる泥棒」RV Ⅹ 87,15である様に思われる（AiG Ⅱ -1 p.249, OERTEL op. cit. 参照)。この一種比喩的表現を GELDNER は “der mit Worten dasselbe tut, was der Dieb mit der Hand, der durch Zauberworte andere um ihr Eigentum bringt”（盗人が手を用いてすることを言葉を用いてする者，呪文によって他人から財産を奪う者）と説明する。**vāk-stena-* であれば「ことばを盗む泥棒」が先ず理解されるであろうから Instrumental *vācā́* を前肢に用いて意味の限定・明瞭化を図ったと考えれば，この語も格形を前肢とする複合語と認められるであろう。同様の説明は ―この段落の始めに触れた如く― *vācārambhaṇa-* にもまさしく当てはまる。その様な格形を前肢とする複合語については cf. AiG Ⅱ-1 p.246―250：§99〔Tatpuruṣa〕, 更に, p.277f.：§109a〔Bahuvrīhi〕; 今問題の二語に限らず，これらの語のいくつかには，格形の前肢をもつ verbale Rektionskomposita〔Typ *puraṃ-dará-*：AiG Ⅱ-1 p.201―213〕への模倣が背景にあったとも考えられる。KUIPER の挙げる例から推察されるように，*vāc-* が子音語幹であることから来る Sandhi 上の不自由さが *vācā* を採用することによって避けられる，ということもいくらか与っているかもしれないが，直接的な理由とは思われない。結論として，KUIPER の Prākrit 影響説は ―*ārambhaṇa-* が「拠り所」しか意味し得ないというのでない限り― 迂遠と言わざるを得ない。

3.4. 言うまでもなく，*ārambhaṇa-* は *ā-rabh*「つかまえる」(意味発展により，更に「とりおこなう」・「始める」等も）の派生語として「つかまえること」を意味し得る。二次的な *-m-*[10]は Kausativ 及び名詞派生語等の Vollstufe において Yajurveda 散文以来規則的に見られる：例えば *ārambhá-*「獲得」MS[P] Br., *-ārambhaṇa-*「始め」AB KB PB, 等々。R̥gveda 以来 Brāhmaṇa に至るまで在証される *ārámbhaṇa-*, *an-ārambhaṇá-* が KUIPER, IIJ 1 p.155―159の主張する如く “point of support” として *rabh*「つかまえる」とは異なる語根 *rambh*「よりかかる」から出自し，「つかまえる」＞「つかまる」

の如き意味展開によらないとしたところで,[11], *ā-rabh*「つかえまえる」の派生語としての*ārambhaṇa-*に「つかまえること」が(少なくともChāndogya-Upaniṣadの時代に)排除されることは有り得ない。

4. 結論:*vācārambhaṇaṃ vikāro nāmadheyam*は「変様/変容(物)はことばによる捕捉/把握であり,名付けである」と解釈するのが妥当と思われる(辻1953及びHAMMの訳がこれにあたる:次項付録の4-Aの組合せ。SCHAYERも同様の見解をとるが,*vācā-rambhaṇam*を二語と解する)。以下に手元に調べられる限りの諸現代語訳を列挙して結びとする。

5. 付録:現代語諸訳一覧

左端コラムの表示□-□の説明:

1:*vikāro*で文(句)を区切る
2:三語を全て述語名詞ととる
3:*nāmadheyam*を主語ととる
4:*vikāro*を主語ととる

A:*vācārambhaṇam*を「ことばによる捕捉」(Substantiv)ととる
B:*-ārambhaṇa-*を「拠り所」ととり,*vācārambhaṇa-*をSubstantivととる
B':同じくAdjektivととる
C:その他の意味でSubstantivととる
C':その他の意味でAdjektivととる

書名の後に〔‹ MORGENROTH〕とあるのは,Wolfgang MORGENROTH, Chāndogya-Upaniṣad. Versuch einer kritischen Ausgabe mit einer Übersetzung und einer Übersicht über ihre Lehren. Dissertation Jena 1958, p.515に基づく引用であることを示す。

4-C' MAX MÜLLER (1897) SBE 1 92f., 95f.
the difference being only a name, arising from speech

1-C BÖHTLINGK (1889) Ḱândogjopanishad 61f., 63
Eine Umwandlung (Fußnote : D.i. ein besonderes Wort für ein Produkt desselben.) ist eine Wortklauberei. Lehm(etc.)ist der Name in Wirklichkeit.

4-C WINTERNITZ (1909) Geschichte der indischen Literatur I 214
… die Verschiedenheit bloß im Worte liegt, bloß ein Name ist

2-B OLDENBERG (1915) Die Lehre der Upanishaden 70
es haftet am Wort, ist eine Umwandlung, eine Benennung (cf. Weltanschauung, 1919, 103 "Haften am Wort")

4-B/C Hillebrandt (1921) Aus Brahmanas und Upanishaden 〔‹ Morgenroth〕
die Umwandlung nur ein Behelf im Ausdruck, eine Bezeichnung

4-A Schayer (1922) Zeitschr. f. Buddhismus 4 219—221 (Rz. Hillebrandt)
[die] Umwandlung [ist eine] Ergreifung durch die Rede [, eine Bezeichnung] (推定)

4-C Tuxen (1921/1922) De aeldste Upanishader 〔‹ Morgenroth〕
Omformningen er en sproglig Konstruktion, en Benærvne

3-B Hertel (1922) Die Weisheit der Upanischaden[2] 〔‹ Morgenroth〕
Der Name (der einzelnen Erzeugnisse)ist nur ein Anhalt für die Sprache, eine Entstellung (des wahren Sachverhaltes)

2-C Keith (1925) The Religion and Philosophy of the Veda and Upanishads 530
(可能性として：) a matter of words, a change, a simple name

4-B Geldner (1928) Vedismus und Brahmanismus 110
Ein Sich-klammern an Wort ist die Umwandlung, ein bloßer Begriff.

4-C Senart (1930) Chāndogya-Upaniṣad 〔‹ Morgenroth〕
les diverses modifications n' en étant que distinction de nom et affaire de langage et n'y ayant qu'une réalité

4-C Hume (1936) The Thirteen Principal Upanishads[2] 240f., 242
the modification is merely a verbal distinction, a name

4-C Coomaraswamy (1936) HJAS 1 (Carpani NIA 2 163より引用)
Modification is a matter of wording, a giving of names to things

2-B Papesso (1937) Chāndogya-Upaniṣad 〔‹ Morgenroth (一部修正)〕
(tutto ciò essendo) un appigliarsi alla parola una modificazione un nome

4-B/B' Deussen (1938) Sechzig Upanishad's des Veda[3] 160ff.
an Worte sich klammernd ist die Umwandlung, ein bloßer Name

2-B Carpani (1939) NIA 2 163
(tutto essendo) una pura distinzione verbale ("un appigliarsi alla parola"), una modificazione, un nome

4-C' Radhakrishnan (1953) The Principal Upaniṣads 447
the modification being only a name arising from speech

4-A 辻直四郎 (1953) ヴェーダとウパニシャッド 219, 221
變異は〔唯〕言語による把握（＝語彙上の区別）なり。即ち名稱なり。

2-C RUBEN (1955) Beginn der Philosophie in Indien 167, 171
(nämlich als) Schöpfung durch die Rede, Umwandlung (des Tons etc.), Namengebung / (sein Name Feuer etc. ist nur) eine Schöpfung der Rede (des Seienden), eine Umwandlung (des Seienden), eine Namengebung

1-C VAN BUITENEN (1958) IIJ 2 304
(the Supreme's) creation is (his) taking hold of vāc

2-C MORGENROTH (1958) Dissertation Jena 318 usw.
(und das)eine Schöpfung durch das Reden, eine Umwandlung, eine Namengebung

4-B' 辻直四郎 (1959) インド集 67
変異は言語に依存する名称なり

3-C EDGERTON (1965) The Beginnings of Indian Philosophy 170, 172
the appellation (of individual manifestations; of any particular product of earth) is a verbal handle, a modification 〔p.172：(of the underlying reality)〕

4-C ZAEHNER (1966) Hindu Scriptures 105f.
its modifications are verbalizations, 〔mere〕 names

2-A THIEME (1966) Upanischaden 44, 46
〔'Lehmkloß' ist. etc.〕 eine Bezeichung (wörtlich： 'ein Erfassen durch die Rede'), eine Sonderform, eine Benennung (d. h. ein für praktische Zwecke künstlich geschaffener, sekundärer Begriff)

1-A 岩本裕 (1967) ヴェーダ・アヴェスター 211
変異とは言語による把握である（「語彙上の区別があるのみ」の意。)。土という名称こそ真実なのである。(p.212：変異とは言語の把握であり，三つの色という名称こそ真実なのである。)

4-A HAMM (1968) WZKSO 12/13 = Fs. Frauwallner 150, 152
Die Umgestaltung (…) ist ein (sekundäres) 'Be-greifen' mit der Sprache, eine Namensgebung

3-A 服部正明 (1969) バラモン教典 112, 114 (～古代インドの神秘思想, 1979, 130, 133)
名称はことばによる捕捉であり，変容である。

4-C HANEFELD (1973/1976) Philosophische Haupttexte der älteren Upaniṣaden 117
：ChU Ⅵ 1,4—6

Redegebrauch ist die Umwandlung〔…〕, eine Namensgebung

2-C　　HANEFELD do. 121：ChU Ⅵ 4, 1—4

〔der Name Feuer ist etc.〕Redegebrauch, Umwandlung, Namengebung

2-C　　松濤誠達（1980）ウパニシャッドの哲人　190, 193

（「泥のかたまり」というのは）ことばによる表示であり，変形であり，名称である。

4-B'　　MEHLIG（1987）Weisheit des alten Indien Ⅰ 296, 298

so ist die Umwandlung ein bloßer Name, der auf der Sprache beruht

[4-B　　宇井伯寿（1922）ウパニシャッド全書第３巻　p.146

変異は語の據るものにして，名なり，真実は泥たるのみ]

注

（1）Cf. KUIPER, IIJ 1（1957）p.155 "In spite of the fundamental importance of this passage, on which even materialistic doctorines have founded their claim to be orthodox and in agreement with the *śruti*, neither the syntactical relation between *vācārambhaṇam* and the following two words, nor its formation, nor even the exact meaning of *-ārambhaṇa-* alone is clear. Keith's remark that 'the sence of *vācārambhaṇa*（of dubious formation）is uncertain' is as true to-day as it was in 1925."

（2）その中心となるのは「それをもってすれば（未だ）聞かれていないもの（/こと）が（既に）聞かれたものに，考えられていないものが考えられたものに，認識されていないものが認識されたものになる *ādeśa-*」である。*ādeśa-* については次の二論考がほぼ時を同じくして現れた：　井狩彌介，印仏研　17-2（1969）p.684-689（：『等置を表現する定句；等置式；等價結合；等價，同値』），THIEME, Mél. Renou（1968）p.715-723 ＝ Kl. Schr. I p.259-267（："Substitut, Substitution", cf. Upanischaden, Ausgewählte Stücke, 1966, p.44："Ersetzung〔＝Substitutionsmethode〕"），さらに WEZLER, KZ 86（1972）p.7ff.（：「代置物」の意味の *ādeśa-* は，THIEME, 井狩の指摘する ŚB Up. Pāṇini とその注釈文献にのみ見られ，他の Kalpasūtra には見出だされない），服部正明，世界の名著１，バラモン教典・原始仏典，1969，p.113 注2（：『神秘的同一化の原理』），松濤誠達，人類の知的遺産２，ウパニシャッドの哲人，1980，p.190（：『置換えの原理』）参照。HAMM, WZKSO 12/13＝Fs. Frauwallner, 1968/1969, p.150 は伝統的解釈に近く，Anweisung（指示・指図；使用の手引）を訳語として選び，脚注５に *ādeśa* auch：Lehre, Vorschrift. Meine Wortwahl versucht, das Magisch-Praktische des Wissens, zu dem eine Unterweisung führt, auszudrücken（*ādeśa-* は教説，規定〔命令・指図〕をも意味する。私の〔訳〕語の選択は〔ウパニシャッドにおける〕教えが行着くところの知の魔術—実用性を表現しようとしたもの）と述べ，THIEME の訳例を異説として挙げる。

THIEME, 井狩の指摘通り，*ādeśa-* は Pāṇini の術語ではっきりと「代置物」乃至「代置」を

意味し，同じ訳語によってUpaniṣad（及びŚatapatha-Brāhmaṇa）のかなりの用例が解釈可能である。従って，THIEMEの見解（Kl. Schr. 267)の様に，*ādeśa-*が「…の場所に位置するもの」＝「代置物」の意味で*deśe* ＋ *ā* 「…の場所に」から作られた前置詞支配複合語（präpositionales Rektionskompositum）である可能性は考えられる；この種の複合語，例えば*ā́-pathi-*，*ā-pathī́-*「道の上に存する」，についてはAltindische Grammatik Ⅱ-1 p.312f. 参照。しかし，*ādeśa-*が他の場所で，動詞*ā-diś*の派生語として「指示・教令」をも意味することは否定できないし(例えばTaittUp Ⅰ 11参照)，二つの同音異義語をウパニシャッドの用例に即して区別することは事実上できない。また，「…のかわりに」という場合には，本来「地方，方面」を意味したであろう*deśa-*よりも*sthāna-*，*loka-*の方が相応しいのでは（WEZLER, KZ 86 p.12ff. の引用例を参照），という疑問もある。THIEMEは最終的には断定を避け，'etwas hinweisen', d. h. 'an einen Platz weisen' … 'an einen Platz weisen, der bis dahin von etwas anderes eingenommen wurde'（「〔あるものを〕そこへ向けて指示・指定する」即ち「ある場所へ指示・指定する」…「それまで別のものが占めていた場所に指示・指定する」）という意味展開の可能性をも挙げている。

動詞*ā-diś*からの直接派生の可能性には，むしろ，*ādeśa-*, *ā-diś*がUpaniṣadに於いてA（*brahman-*，*ātman-*等の根源的なもの）をB（現象界中の事物）であると述語によって措定・断言する，という文脈で用いられる例が鍵となるように思われる（井狩，loc.cit. 685—687参照)。更に*nā́mādiśet*「名を明示すべし」ŚB V 2,4,20，*nāmādeśa-*「名を挙げること」ŚrSū. ＋（cf. Pāṇ Ⅲ 4 ,58)，（cf. *nā́ma grabh*）も参考となろう；これらの用例についてはWEZLER, KZ 86 p.8—11参照。*ā - diś*の用例を詳しく検討したEva TICHYは『第四の（＝「何かを指し示す」から「同一化；代置，代置物；代置する」への）意味展開は，「Xは即ちYである」という形における表現との，文脈的な繋がりから来たものであろう，もし名詞*ādeśa-*にその説明が求められるべきでないとしたならば；THIEME…を参照せよ』と述べる（Münchener Studien zur Sprachwissenschaft 38, 1979, p.171—228：Semantische Studien zu idg. 1. *deiḱ "zeigen" und 2. *deiḱ "werfen"；引用はp.189から)。結論として，Pāṇiniの*ādeśa-*「代置」もこの様な*ā - diś*の「〔AをBであると〕指し示す」からの意味展開の延長にあると考えるのが妥当と思われる。

問題はUddālaka Āruṇiの*ādeśa-*が単なる「指示・教令」の意味に止まるのか，より特殊な意味の込められた「措定，（…であるという形での）指定，断言」か，それとも既にPāṇiniの術語にはっきりと表れるような「代置，代置物」の意味が意識されているのか，と言うことにあるように思われる。もし「代置，代置物」まで行っていれば機知に富んだ掛言葉の可能性もあろう。井狩loc.cit. 685ff.はVAN BUITENENの指摘から出発してUpaniṣadにおける*ādeśa-*の用例を調査しているが，その検討が示すのは，この語が当時の思弁家たちにとって流行の概念とでもいうべき重要な術語であり，主として「(主に至高存在を）…であると措定・指定・断定すること」(ないし具体的にその内容：〔例えば至高存在の〕何であるかという断言）を意味した，ということである。とすれば，Uddālaka Āruṇiの用いる*ādeśa-*の意味もこの領域に求められよう。彼に於いても*ādeśa-*の字句的意味は，それが至高存在について用いられていないとは言え，依然，動詞*ā - diś*から派生する「…であると措定・指定・断定する

こと」,「措定・措定表現，措辞，述語表示，断言」であったと思われ，内容の斬新性はむしろ彼の物質主義的哲学の内容と抽象的思考方法に起因するものと考えるべきであろう。

(3) Cf. 服部，バラモン教典 p.113 注3：『ウッダーラカが語ろうとする神秘的同一化の原理は，第四節の「真にあるものは三種の色にほかならない」ということであって，本節ではそれを説き明かすための喩例をあげていると解される』。その際，土が白（：水)，銅が赤（：熱)，鉄が黒（：食物）の三要素を代表することはLimaye / Vedekar, Eighteen Principal Upaniṣads (1958) p.136, Hamm, WZKSO 12/13 p.150 注9の指摘する通りである。

(4) *yathā* は最終的にはⅥ1, 6の *evaṃ somya sa ādeśo bhavati*「そのように，我が子よ，その *ādeśa-* は成る（機能する/用いられる，または：ある［？］)」に受けられる（Hamm, loc. cit. 150 注7)。

(5) van Buitenen は同論文（p.302及び注32f.)において *vi-kṛ*「変容・変質させる，多様にする，分ける etc.」を *vy-ā-kṛ*「引離す，様々に派生・展開・形成する（他動詞)」と同義に解して独自な解釈（“creation”, Ruben の訳をも参照）の基礎としているが，根拠を欠く。*vy-ā-kṛ* の「(あるものから）様々に（ものを）作りなす，展開する，派生させる」の用例はすぐ後の ChU Ⅵ3, 2に見られる：*hantāham imās tisro devatā anena jivenātmanānupraviśya nāmarūpe vyākaravāṇi*「よし，私はこれら三神格に，この（＝私の）生きた命をもって順次入り込み，名称と形態とを形成／展開するとしよう」。動詞 *vy-ā-kṛ* と *vyākaraṇa-*「文法」については Thieme, StII 8/9 (1982/1983) p.23ff. 参照。

(6) 語根 *dhā*「置く，据える」の用例に多く現れる ‘bestimmen’「定める，決定・指定する」の意味を参照。更にヒッタイト，トカラ，ギリシャ，古ラテン語に見られるインド・イラン語の *nāma dhā* の対応形に関して Kuiper, Kratylos 32 (1987) p.66をも参照のこと。

(7) Oertel が *vācārambhaṇam* を ‘Es ist (dies) ein Erfassen (des Gegenstandes nicht seiner Essenz nach, sondern nur) durch ein Wort (eine Benennung)’, d. h. ‘es etikettiert den Gegenstand nur, ohne sein wahres Wesen zu erkennen’ (「〔これは対象を，その本体によってではなく，ただ〕言葉によって摑まえること〔名付けること〕である」，つまり，「本当の実体を認識することなく，対象にレッテルを貼るにすぎない」）と訳しているのは，スィンタクスの上から述語名詞と考えていることになるが，彼は単に Oldenberg の訳（三語を全て述語名詞ととる）を材料として，その *vācārambhaṇam* の部分のみを訂正しようとしたに過ぎない。

(8) Kuiper は The circumstance that *vācārambhaṇa-* has probably been created as a technical form of the philosophical speculation would seem irrelevant in this respect, as most *ādeśas*, such as *tad vanam*, *āditγo brahma*, *netineti* are normal idiomatic phrases. We have no reason to suspect that the case of *vācārambhaṇa-* may have been different (IIJ 2 p.307) というが，このような主張によって “Philosophen-Kompositum” の可能性が否定されるとは思えない。第一，*vācārambhaṇa-* は Kuiper が van Buitenen の仮説に従って考えるような “*ādeśa-*” の一部を構成する語ではなく，説明中の用語である。— “Philosophen-Kompositum” という観点から見ると，例えば仏教の基本概念の一つ，*pratītya-samutpāda-* (pāli *paṭicca-samuppāda-*)「に依っての生起」『縁起』にも，一種のかみくだいた表現（Paraphrase; 日常語からの影響？）という性格と並んで，哲学上の述語という特殊な条件があるように思われる。

(9)　複合語の前肢に例外的に見られることのある Stammerweiterung (AiG Ⅱ-1 p. 61ff.). 例えば *ūrjād-* (Vok.) "Kraftnahrung essend" (*ūrj-* ＋ *ád-*, cf. AiG Ⅱ-1, Nachträge p. 21 ad 63,4) をも参照せよ。

(10)　おそらく *rabh/labh* の語根構造の上から "*saṃprasāraṇa-*" Ablaut (**r̥bh*) が避けられ，例えば VAdj. *rabdhá-* ‹‹ **rabh-tá-* に見られる様に語根に *-a-* が保持されたことから，この疑似 Schwundstufe *a* に *an, am* の Schwundstufe としての *a* (<**m̥*, **n̥*) を連想するアナロギーにより (cf. *bandh* ∷ *baddhá-*, *stambh* ∷ *stabdhá-*)，二次的な Vollstufe *rambh/lambh* が作られたものと考えられる。

(11)　Kuiper の主張する語根 *rambh*「よりかかる」(IIJ 1, 1957, p.156ff.;彼は語源的に *ram*「しずまる，憩う」が *-bh* により拡大されたものと説明する；更に cf. Nasalpräsentia, 1937, p.148f., Mayrhofer, Kurzgefaßtes etymol. Wb. Ⅲ p.42) の設定の当否は，*ārámbhaṇa-*, *an-ārambhaṇá-* の他には，要するに，名詞 *rambhá-*「杖」(Geldner) または「支え」(Grassmann) RV Ⅷ 45, 20, *rambhín-*「杖をつく人」(？) RV Ⅱ 15, 9，そして次の RV Ⅰ 168, 3 の動詞形 *rārabhe* (Lokativ 支配に注意) および名詞 *rambhíṇī-* の解釈に懸かっている：

áiṣām áṁseṣu rambhíṇīva rārabhe
hásteṣu khādíś ca kr̥tíś ca sáṃ dadhe
"auf ihre Schultern lehnt sich (die Lanze) wie (eine Frau), die sich anlehnt. In ihren Händen sind Spange und Schwert (？) vereinigt" (Geldner)：『彼等 (Marut たち) の肩には〔槍が〕もたれかかっている，もたれかかる〔女〕のように。彼等の手には腕輪と剣 (？) とが一つになっている』。

この箇所は主語が述べられておらず，解釈には論議の余地がある。例えば Rodasī (Marut たちの共通の愛人) が「(年をとって) 杖をつく女のように (／もたれかかる女〔？〕のように)，彼等の肩のところで〔彼等の衣服を〕(何度も何度も) つかまえる (＝つかまる，しがみつく)」とも解釈できる。また，*rabh* に以下に見るような「つかまる，しがみつく」の意味を考えれば，「槍 (*r̥ṣṭí-*, femininum) が彼らの肩のところで〔Marut のひとりひとりを/に〕つかまえている/つかまっている」(杖をつく女は杖につかまり，槍は逆に Marut たちにつかまる) という擬人的表現と解釈できる。やはり主語に〔槍が〕を補う Renou は *rambhíṇīva* を『〔木に〕まつわりつく〔蔓植物〕のように』と解釈している (Études védiques et pāṇinéennes X, 1962, p.24)。語根 *rabh* から出発する場合，*rārabhe* には *bābadhe*「押し退ける」(ただしこの場合の語根は長母音をもつ *bādh*) のように，Intensiv Indikativ 3. Sg. Med. (cf. Narten, Sprache 27, 1981, p.3　注11), Intensiv Perfekt 3. Sg. Med. (cf. *badbadhé*：Gotō, Die "I. Präsensklasse" im Vedischen, 1987, p.216　注448)，あるいは単なる Perfekt Indikativ 3. Sg. Med. (cf. MacDonell, Vedic Grammar p.352, p.359) の可能性があり，勿論，全てに亙って1. Sg. Med. とも説明できる。(*khādí-* は Hoffmann, Der Injunktiv im Veda, 1967, p.210 注176によれば，獣の歯，牙を数珠繋ぎにしたもの。)

名詞 *rambhá-* の唯一の出典箇所 Ⅷ 45, 20にも動詞 *rarabhmā́* が並んで用いられている：

ā́ tvā rambháṃ ná jívrayo
rarabhmā́ śavasas pate

“Wir halten uns an dich wie Greise an den Stab, o Herr der Kraft”（GELDNER）：『我々は汝に身をささえ（てい）る，年寄り達が杖に，の如く，おお力の主よ』。

KUIPER は *rarabhmā́* の Akkusativ 支配に注目して，彼の設定する *rambh*「よりかかる」が早くから *rabh*「つかまえる」と混同された例と推測している（IIJ 1 p.157)。*rarabhmā́* は *rabh* の Perfekt 1. Pl. と判断されるが（我々は汝をつかまえている＝につかまっている)，Aktiv は孤立例である（場合によっては GOTŌ，op. cit. p.67f. の例に参照)。

ā - rabh「つかまえる」には，他にも「つかまる，しがみつく」(格支配はいずれもそのまま，つまり Akk. 支配）という用例が十分明瞭に存在する：RV Ⅲ 53, 2

pitúr ná putráḥ sícam ā́ rabhe te

「子が父の〔着物の裾をつかむ〕ように，私は汝（＝インドラ）の着物の裾をつかむ」，

さらに，Ⅹ 133, 6（下に引用)，Ⅰ57, 4, Ⅰ34, 2，Ⅰ182，7（但しすぐ下の引用を見よ)。

「拠り所」を意味する *ārámbhaṇa-* も「つかま（え）る所」から導き得る。例えば RV Ⅰ 116, 5(Aśvin の Bhujyu 救出）では「つかまえる所のない」としか訳し得ない *a-grabhaṇá-* に並置されている：

anārambhaṇé tád avīrayethām

anāsthāné agrabhaṇé samudré

「その際，汝らは勇者ぶりを示した，拠り所の無い，

立つ瀬の無い，捕まえる所の無い海の中で」。

Ⅰ182，6 では，同様に Aśvin に救出される Tugra の息子が

ávaviddhaṃ taugr$_i$*yám aps*$_u$*v àntár*

anārambhaṇé támasi práviddham

「水の中に突き落とされた，

拠り所の無い暗闇に突き入れられた Tugra の子を」

と言われ，直接これに続く Ⅰ182, 7では

káḥ svid vr̥kṣó níṣṭhito mádhye árṇaso

yáṃ taugr$_i$ *yó nādhitáḥ paryáṣasvajat/*

parṇā́ mr̥gásya patáror ivārábha

úd aśvinā ūhathuḥ śrómatāya kám//

「いったい潮の只中に，立っていたのは何の木か，

Tugra の子が窮地に陥って，これにしがみついたのは，

空飛ぶ獣の羽翼（または羽毛）を捕まえようとするかのように，　V たち

両アシュヴィンよ，汝らは，まさに名声に至るべく，〔彼を〕引き上げた」

とある。つまり，Tugra の子は「拠り所のない」海の中で，やっとのこと木に「抱きついた，つかまった」(*pary-áṣasvajat*）のである。*ā-rabh* と *pari-ṣvaj* の文脈的な繋がりは次の二つの Pāda の比較からも知られる：X 133, 6 *sakhitvám ā́ rabhāmahe*「我々は〔汝＝インドラとの〕仲間関係をつかまえる（＝にしがみつく，を頼みとする)」〜 ibid.2 *táṃ tvā pári ṣvajāmahe*「我々はそういう汝（＝インドラ）を抱きしめる（＝に抱きつく，しがみつく)」。

→ W.N. Brown Aufs. über Hell

?
vgl. appatitthe an-ālambane ... gambhīre Pāli (→ ARAMAKI 日仏教会 , allerdings falsch übersetzt)

〔*Exkurs* I 182, 7c について：GELDNER によれば，Pāda c は um sich daran festzuhalten wie an dem Gefieder eines fliegenden Vogels（あたかも飛ぶ鳥の羽毛に，の如く，つかまる為に〔しがみつこうとして〕)（つまり，必死の努力で）の意味で，Pāda ab に連なり，BAUNACK の指摘するように，*parṇá* には羽毛と木（Pāda a）の葉の両義が懸けられているという。比例的に見て ab と cd をそれぞれ一つの文と考え，c を「あたかも鳥（空飛ぶ獣）の羽を掴まえる為のように，つかまえようとするように」，つまり，それほど軽々，易々と救い出した，の謂とも考えられる。〕

要するに，KUIPER の指摘する *rambh* 「よりかかる」は独立の語根としては設定の必要がなく，*rabh* 「つかまえる」の意味展開の中で説明され得る，という可能性は否定できない。*rambhá-*「杖/支え」が *rabh* からの派生語であるとすれば，二次的な *-m-* は *skambhá-*「支柱」，*skambh*「(例えば支柱が）突っ張って支える」，*stambh*「力む，押しやる，突っ張る，支える」へのアナロギーから生じたと考えられる。意味の上からは，nomen actionis「つかま（え）ること/ところ」>「(人がそれを/に）つかま（え）るもの」>「杖/支え」と説明可能であるし，アクセントは直接 *skambhá-* か，あるいは他の nomen agentis に倣った，と仮定できよう。(KUIPER の『よりかかる』to lean on から出発しても，同様な意味展開を考えないと「杖/支え」は導き出せない。何故なら，「杖」は「つかま〔え〕られる」ものであると同様，「よりかかられる」ものであるから。あるいは，あくまで KUIPER の意を汲むなら，彼の *rambh* の本来の意味を「支える」と修正すべきか：nomen agentis「支えるもの」?。) *ārám-bhaṇa-* の *-m-* も同様に説明できるし（cf. *skámbhana-*「支え，支柱」)，あるいは Ṛgveda の段階で既に，注9に述べた様な過程が全体として（場合によっては上述のようにして先に生じていた *rambhá-*「杖/支え」の支援を得て）起こっていた，と考えることにも何ら障害はない。

語根 *rabh, labh* の発展史については，GOTŌ，印仏研24-2, 1976, p.1015—1007(Jubilar の下に提出した修士論文に遡る）をも参照のこと。(現論考は同論文を補う意味のものである。)

－その他の言及箇所・語彙抜粋－

ChU	VI 1,4-6;4,1-4	1.1. ＋
	VI 3,2	注 5
	VI 8,4	2.1.
Ś́B	XII 2,4,1	3.2.
RV	I 116,5ab	注 ~~10~~ 11
	I 168,3cd	注 ~~10~~ 11
	I 182,6ab; 7	注 ~~10~~ 11
RV	II 53,2c	注 ~~10~~ 11
	VIII 45,20ab	注 ~~10~~ 11
	X 125,8ab	3.2.
	X 133,2e; 6b	注 ~~10~~ 11

pratītya-samutpāda-	注 8
vācástena- (RV X 87,15)	3.3.

インド思想史研究　6

1989年11月10日発行

発行者　インド思想史研究会
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
インド哲学史研究室内

編集者　山上證道・井狩彌介・徳永宗雄

印刷所　昭和堂印刷所
京都市左京区百万辺交差点上ル

STUDIES IN THE HISTORY OF INDIAN THOUGHT
(INDO-SHISŌSHI KENKYŪ)

SPECIAL ISSUE
DEDICATED TO PROFESSOR MASAAKI HATTORI ON THE OCCASION OF HIS RETIREMENT FROM KYOTO UNIVERSITY

No. 6 November 10, 1989

CONTENTS

Society for the Study of
the History of Indian Thought
c/o Department of Indian Philosophy,
Faculty of Letters, Kyoto University